HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	エゾオオカミをめぐる歴史と文化 : 日本における研究史およびオオカミ観形成過程の検討 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	梅木, 佳代
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13710号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/76328
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Kayo_Umeki_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　梅木　佳代

学位論文題名

エゾオオカミをめぐる歴史と文化：日本における研究史およびオオカミ観形成過程の検討

本論文の観点と方法

絶滅した日本のオオカミ（ニホンオオカミは 1905（明治 38）年、エゾオオカミは 1896～1903（明治 29～36）年に絶滅）に対する関心は高いが、社会的にも学術的にも議論は混迷していると指摘されている。こうした状況は、明治時代以来およそ 150 年間にわたって発信・蓄積されてきた情報がまったく整理されていないことに起因する。特に、北海道のエゾオオカミについては研究成果の集約・整理を試みた事例はこれまでに存在していない。エゾオオカミに関する研究・議論においては、生息していた期間の記録や情報、確実な標本資料が非常に少ないため、仮説としての記述が、繰り返し参照されるうちに単純化され、それをもって新規の議論に供されてきた。

こうした研究状況に対して本論文では、まず明治時代以降に発表されたオオカミに関する 970 の文献の記述内容を分析・考察の対象とし、日本のオオカミの研究史を整理した。続いて、北海道のエゾオオカミについては、和人側の記録として、北海道内の市町村が刊行する 212 の「市町村史」（合計で 369 冊）を対象とし、アイヌ側の情報としては、口承文芸と更科源蔵の聞き取り調査記録などを研究対象とした。これらを対象とすることによって、過去の北海道の人々のオオカミ観について、歴史的・文化的側面から実態を明らかにした。併せて、今後、日本のオオカミ全体に関わる議論・研究の進展に資することを、最終的に目指すものである。

本論文の内容

序章では、研究の背景と目的、研究手法、本論文の構成と主要な用意の定義、表記のルールなどが記された。

第 1 章では、日本のオオカミを対象とした議論に取り組むにあたって、その研究史の整理を行った。明治時代以降、日本のオオカミをめぐる研究には 2 つの画期があることを確認した。明治時代から 1920 年代にかけては、主として日本のオオカミについての名称と分類が検討された時期と位置づけた。 1 つめの画期は 1930 年代にオオカミの分類学上の位置づけが確定したことである。以降の議論は、「日本のオオカミ」であるニホンオオカミと、そこから除外され、しかしそれによって独立性を保つエゾオオカミという主・従の位置づけに基づいた展開が見られる。「日本のオオカミ」であるニホンオオカミは、その後の戦時下での国威発揚の一環として日本人の特異性を論じる議論と結びついていくが、同時に従来のオオカミ観の中心となっていた非親和的な害獣としてのオオカミの位置づけが時代を下るにつれて不明確となっていったことを明らかにした。

1990 年代、日本のオオカミを「復元」させることを目的としてオオカミの再導入が提唱されたことが、研究史上 2 つめの画期となった。これまでになかった新たな話題と論点を得たことで、日本人がオオカミに向ける関心の度合いが高まった。その一方で、人とオオカミの関係性を問い直す内容の研究が増加し、人とオオカミの非親和的な関係性の実態が再び認識されてきたとした。

第 2 章では、絶滅したエゾオオカミが地域の歴史の中でどのような存在としてみなされてきたのか、北海道内の各市町村史にみられる記述から検討を行った。これまで、エゾオオカミは明治時代以降に北海道に持ち込まれた家畜に対して甚大な被害を出した害獣であったと理解されてきたが、実際にはエゾオオカミによる家畜被害は江戸時代から起きていたことが確認できた。また、エゾオオカミによる家畜被害については、新冠牧場における事例が広く知られてきたが、新冠以外の複数地域でも被害の状況が明らかとなった。さらに家畜に対する被害だけでなく、開墾や道路の切り開

きなどの場面で突然接近・接触したオオカミが、人に対して強い脅威や恐怖感をもたらしていたことも確認できた。北海道における人とオオカミの関わりについては、害獣としてのオオカミの位置づけが中心となってきたことがわかった。

第 3 章では、アイヌとオオカミの関係性について、先行研究から基本となる位置づけの確認を行った。その中から、アイヌがオオカミの狩猟を行わなかったと理解できる記述に注目し、実態がどうなのかを確認した。アイヌの口承文芸のうちからオオカミ猟の様子が描写されるテキスト 6 編を抽出し、内容の整理検討を行った。結果として、口承文芸中の描写には、オオカミの狩猟を行わない、あるいは禁じるような言及は見出されなかった。

併せて、なぜアイヌがオオカミを狩猟しなかったという言説が普及しているのかという疑問について、聞き取り調査記録を対象として検討を行った。更科源蔵による刊行文献の内容は、刊行時期によって変化していたことがわかった。その変化の理由を、聞き取り調査の記録である「更科ノート」〔『コタン探訪帳』19 冊『コタン探訪帳記』1 冊〕の内容に求めた。検討の結果、更科はアイヌからオオカミの狩猟を行うとする内容の聞き取り結果を得ていたが、刊行文献には反映させず、むしろ後年の著作からはアイヌがオオカミの狩猟に価値を見出していなかったと読みとれる記述を行っていたことを明らかにした。

第 4 章では、日本のオオカミの研究史、エゾオオカミに関する先行研究の内容、市町村史にみられた和人のオオカミ観、口承文芸および聞き取り記録の中に確認できるアイヌのオオカミ観をそれぞれ統合し、北海道においてオオカミをめぐる言説がどのように位置づけられ、変遷を経てきたのかを考察した。

日本人とオオカミはもともと親和的な関係性にあり、それを変化させたのは西欧由来の要素であったと理解されてきた。オオカミは害獣として恐れられるより、神獣として尊ばれるべき野生動物であり、そしてそのように認識できることこそが本来の日本人のあるべき姿だとされる。しかし、研究史の整理を行った結果では、そうしたオオカミ観はオオカミの絶滅後に生み出され、戦時体制下において受容・普及されたものだった。また、特に北海道を事例としてみた場合、人とオオカミは非親和的・敵対的な関係が中心であった。本論文における対象資料には、本州以南であらわれる狼信仰などの人がオオカミに対して向ける親和的な態度はあらわれないとした。

本論文における議論を通して、従来は明治時代に入ってから起きたとされる人とエゾオオカミとの間の軋轢が江戸時代後期まで遡ることが確認されたが、当時の人々はエゾオオカミがもたらす家畜被害のみならず、大型の肉食獣である存在そのものを脅威とみなしていたことも示唆された。家畜被害の有無にかぎらず北海道内の多くの地域でエゾオオカミが捕殺されたのは、脅威の根源となる存在を取り除くことが目指されたためだったとした。

北海道における人とエゾオオカミの関係性については、海外からの思想や技術の流入さえなければオオカミとは平和に共存できたとする理想論が語られ、過去の事実がなおざりにされてきた。現状では、エゾオオカミをめぐる過去の文化を曖昧にし、都合の良いように歴史を修正してきたといえる。過去の人々がオオカミと向き合った際にどのような困難と直面していたのか。エゾオオカミ、アイヌ、和人、御雇い外国人と複雑に絡み合った関係性と要素を分解し、共存していくためには何が必要だったのかを考えていくことが必要だとした。

終章では、各章の検討内容をまとめた上で、今後の研究の課題と展望を記した。